ジョゼフを取りまく人物たち（2）

—ジュリアン・グリーンの『モイラ』について—

井　上　三　朗

目　　次

0．はじめに
1．プレロー
2．サイモン
3．デーヴィド
4．〈取るに足りない人物たち〉
(1)　デア夫人
(2)　マック・アリスター
(3)　キリグルー
(4)　デア夫人の下宿に集まる学生たち
(5)　ジェマイマ
(6)　ファーガスン夫人の下宿の女中
5．モイラ
6．おわりに

(太字は今回掲載分)[27]

4．〈取るに足りない〉人物たち

これまでプレロー、サイモン、デーヴィドといったように、ジョゼフと比較的緊密な関係を有する人物たちの役割を検討してきた。こんどはジョゼフとそれほどつながりをもたない人物たちの機能を考えてみることにしたい。すなわち、デ

ア夫人、マック・アリスター、キリグルー、デア夫人の下宿に集まる学生たち、ジェマイマ、およびファーガスン夫人の下宿の女中である。これらの人物たちはジョゼフとほとんどかかわりをもたないために、一見取るに足りないようにみえる。しかしその実、彼らもまた、物語の進展に、あるいは、ジョゼフの生の歩みに一定の影響を与えているのである。

（1）デア夫人

デア夫人は作品の冒頭、下宿に到着したジョゼフのまえに厚化粧をしてあらわれる。そして「夫人は今では彼〔ジョゼフ〕のあまりにそばにいたので紅白粉（べにおしろい）の下の肌のきめがみえた。その紅白粉は彼を憤慨させた」（Ⅰ-1、Ｐ．6）と語られているように、デア夫人は厚化粧のためにジョゼフを反撥させている。この反撥は同時に肉なるものへの嫌悪を意味するだろう。同じ日、ジョゼフは両親にあてて手紙を書いている折、夫人のことを書こうかどうかまよい、「デア夫人が紅をつけていることを両親が知ったら…(…)あの化粧した顔が彼にはおぞましく思われた」（Ⅰ-2、p. 7）と考えている。ここでデア夫人にたいする反感は歴然としている。しかしジョゼフが否認の対象としてであれ、デア夫人の化粧した顔を想起している点は注目に値いする。ということは、デア夫人の化粧した顔の記憶がジョゼフの脳裡に生々しく焼きついていることになるのだ。デア夫人はその厚化粧ゆえにジョゼフを反撥させながらも、それでいてジョゼフを眩惑しているのである。結局、デア夫人はジョゼフを肉体的なもののほうへ惹きつけているといえるのである。

また、デア夫人が第一部第一章でモイラのシガレットケースにジョゼフの注意を向けていることは重要だろう。ジョゼフを下宿に迎え入れたデア夫人はジョゼフを部屋に案内したあと、「モイラったら、シガレットケースを置き忘れているわ」（p. 6）と叫んでいる。この時点において夫人のことばはさして意味をもたない。しかしのちに女中ジェマイマから、ジョゼフの使っている部屋がかつてモイラのものであったことを聞かされたとき、ジョゼフはこのシガレットケースのことを思い出しているし（II-2、p.97）[28]、さらにその後の物語の展開、すなわち、ジョゼフがモイラと出会い、モイラを相手に性のまじわりをむすび、モイラを殺すという展開を考えあわせるならば、デア夫人のことばは、もしくは置き忘れられたシガレットケースは、ジョゼフとモイラの結びつきを形成したといえるのではないだろうか。この点にかんして、遠藤周作氏は『モイラ』を論じたエッセーのなかで、「下宿の部屋の中に、モイラとよぶ娘がおき忘れた煙草入れをジョゼフがみた時、我々は、彼が、この娘を必ず殺すであろうと知っています」[29]と述べている。

遠藤周作氏がみとめるように、ジョゼフの犯罪がシガレットケースの存在によって作品冒頭から告知されているとは言えないにしても、少なくともこのシガレットケースが、モイラのほうに不可避的にひきよせられていくジョゼフの運命を示唆していることだけはたしかであろう。こうしてデア夫人はシガレットケースのことに言及することによって、ショゼフをモイラのほうにいざなっているとみなすことができるのである。

（2）マック・アリスター

デア夫人の下宿の住人であるマック・アリスターは、ジョゼフの篤い信仰と真面目さのせいで、終始ジョゼフに敵対的な姿勢をとる。第一部第十五章、マック・アリスターはふとした機会をとらえてジョゼフの部屋に許可なしに入ってくる。そしてサイモンがジョゼフにたいしていだく感情[30]のことでジョゼフをからかい、ジョゼフの宗教を馬鹿にし、いかがわしい女の話をしながらベッドの上でみだらな仕草をする。そこでジョゼフは激怒の発作におそわれ、黒いベルトを用いてマック・アリスターを鞭打つのである。

「(…)ジョゼフは耳が燃え立つような気がした。返事もせずに、彼は腰にしめていた黒いベルトをはずし、そしてこの鞭を手に持って、いきなり腕を振りあげた。すると森の中で樹の幹を枝でたたいたときと同じように、自分の腕がひとりでに動くような気がした。幅のせまい革紐がひゅうひゅうという音をたてて生あたたかい空気をひき裂き、マック・アリスターの背中に振りおろされた。相手は唸り声をあげてベッドからころがり落ちた」(p.78)[31]。

この場面で、「森の中で樹の幹を枝でたたいたときと同じように、自分の腕がひとりでに動くような気がした」と書かれているごとく、腕の自動性がみとめられる。この腕の自動性をひき起こすものは、マック・アリスターの挑戦的な態度を目のあたりにして爆発した怒りのすさまじさである。ジョゼフにおける怒りと欲望との結びつきはすでに指摘した。ここでの怒りもまた、抑圧された欲望の表現とうけとれよう。このことは、マック・アリスターに暴力をふるったあと、ジョゼフの内心の声が「お前が殴りたかったのはあいつではない」、それは「ほかの男」で「その名はプレローだ」とつぶやいているところからたしかめることができる(pp.79–80)。第一部第五章、林間の空地に落ちた木の枝を用いて幹をたたきまくったかえでの樹がそうであったように、マック・アリスターは、ジョゼフが自覚しないで愛するプレローの代替物なのである[32]。したがって、「ジョゼフは耳が燃え立つような気がした」というはじめの文のなかの「燃え立つ」(brûler) という動詞は、耳もとでの血のざわめきを示すとともに、情熱・欲望のエネルギーとも関係

し、ジョゼフがこのエネルギーに隷従する寸前の状態を語っていると思われる。激怒の発作は《violence》のあらわれにほかならない。とすれば、マック・アリスターはその挑発的姿勢によってジョゼフの《violence》を顕在化させ、この点でジョゼフを肉なるもののほうへまねいていると考えられるのである。

さらにマック・アリスターは第一部第十六章、『ポリス・ガゼット』という雑誌をジョゼフにみせることで無視できない働きをしている。この章でジョゼフはマック・アリスターに暴力をふるったことを後悔し、彼と和解するため部屋をたずねる。ちょうどそのとき、ジョゼフはマック・アリスターが『ポリス・ガゼット』を読んでいるところに出くわすのだ。

「ベッドの上に腹ばいに寝そべり、両手で頭をかかえたマック・アリスターは『ポリス・ガゼット』を読んでいた。その雑誌のバラ色の頁には、裸体の女の写真が飾られていた」(p.82)。

ここでは、『ポリス・ガゼット』に裸体の女の写真が載っていることが注意をひく。上の描写はジョゼフの視点に立ってなされているので、ジョゼフは当然のことながら写真に目をやっている。しかしこのときのジョゼフの反応にかんしては、作中、何もふれられていない。とはいえ、この雑誌が、すでにひき合いに出したギリシャの神々の裸体の彫像と同じように、ジョゼフを肉なるもののほうにいざなっていることは自明であろう。そうであるならば、マック・アリスターは『ポリス・ガゼット』をみせることによってもまた、ジョゼフを肉体的なもののほうにさそっているのである。

（3）キリグルー

ラテン語の復習教師キリグルーは、第一部第十二章、同郷のサイモンの口ききによってはじめてジョゼフのまえにあらわれる。ジョゼフの部屋を訪ねたキリグルーは肉体のことに話題をむけ、学生たちは「女と酒のことしか考えない」(p.68)し、「本能に屈服している」(p.69) と言い、そして、「君だって他の連中とおんなじ」(p.68) で「われわれ一人ひとりの中にはけだものがひそんでいるんだ」(p.69) と断定する。予言的な響きをもつ、キリグルーの指摘にジョゼフは興奮し、ひどく反撥する。こうしてキリグルーはジョゼフのなかの肉体的部分にふれることで[33]、ジョゼフの純粋志向・ピュリタニスム的態度を際立たせている。けれどもキリグルーのことばは忌避すべきものとしてであれ、肉なるものにたいする意識をうえつけるがゆえに、同時にジョゼフを肉体的なもののほうにひきよせているのではないだろうか。

このことは、次につづくエピソードを一瞥することによって明瞭になるだろう。

ジョゼフはキリグルーが訪問したとき、シェークスピアの『ロメオとジュリエット』を読んでいたのであるが、たまたま意味不明の箇所があり、キリグルーに問いただす。ところが、問題の箇所はキリグルーの教示によって卑猥なことを暗示していることが判明する。激昂したジョゼフは書物を二つにひき裂くのである(p.70)。このくだりはジョゼフの肉なるものへの反撥のすさまじさを露呈しており、ジョゼフの純粋志向・ピュリタニスム的態度をあらわにしている。だがキリグルーはここでもまた同時に、ジョゼフの意識を肉体的なもののほうへ向かわせているのではないだろうか。げんに第一部第十三章、指導教官のタック先生に授業科目の変更を願い出る際、『ロメオとジュリエット』のなかに猥褻な箇所があることを伝えているし(p.73)、第十四章でも、友人のデーヴィドに本を破いたことを告白している(p.75)。これらの行為は、みだらな箇所がいかにジョゼフに衝撃を与え、いかに生々しく脳裡に焼きついているかを如実に物語っている。ここから、キリグルーは真実を教えることでジョゼフに肉なるものを強く意識させたことになる。同じことは、その前の行為についてもいえよう。かくしてキリグルーは肉体の話をし、『ロメオとジュリエット』の中の意味不明の箇所にかんして教えることによって、ジョゼフの純粋志向・ピュリタニスム的態度を表面化させるとともに、肉なるもののほうにジョゼフを押しやっていると判断することができるのである。

キリグルーは第二部第十三章でも登場する。主として学生たちの陰謀を伝えるためにジョゼフのところにやってくるのだ。この陰謀についてはのちにとり上げるけれども、このときキリグルーはモイラのことを話題にしている。「あの女〔モイラ〕は、もしゴリラが言い寄ることがあるとすれば、ゴリラにだって身をまかすだろうさ。(…)あれは、ラテン人たちがルーパと呼んだもの、つまり牝狼だよ、絶えず飢えたけだものなんだ」(p.136)と彼は言う。キリグルーの話は、モイラの肉体的側面のみを強調しており、全面的に正しいわけではない[34]。しかしこの話は、モイラにたいするジョゼフの見方を固定したという点で意味をもつ。この時点でジョゼフはすでにモイラに遭遇し、モイラへの欲望に苦しめられているとはいえ、キリグルーの話をきいたために、ジョゼフがモイラを決定的に肉の化身とみなし、モイラとの愛を肉欲と同一視するようになることは明白なのである。事実、ジョゼフはモイラと性の交わりをむすんだあと、「ルーパ、牝狼」というキリグルーのことばを思い出し、「まさにそうなのだ、モイラは。そして愛とはまさにそれなのだ」(II-22、p.173) と考えている。キリグルーはモイラの話をすることで、まぎれもなくジョゼフの思いをモイラのほうへ向けている。この点で彼はジョゼフを肉なるもののほうへ近づけているのである。

また第二部第十三章において、キリグルーがジョゼフのもとを立ち去る瞬間、握手をするつもりでジョゼフの手に触れるところは無視することはできない。このときジョゼフは怒りの中で、「どうしてぼくにさわるのですか(Pourquoi me touchez-vous?)」(p.138) と叫んでいる。肉体の接触を断固として拒否するこのような態度をとおして、ジョゼフの純粋志向・ピュリタニスム的態度がかいまみられることはほんとうである。しかしこの場面の意味を完全に把握するためには、第二部第二十一章の終わりの場面、すなわち、モイラがジョゼフの髪に手をやるところをひき合いに出さなければならない。ジョゼフを誘惑するために彼の部屋にしのび込んだモイラは、ジョゼフのひたすらな無視と沈黙をまえにして、とうとう部屋を出ていこうとする。だが出ていく真際、モイラはジョゼフの部屋の鍵を床のうえに落とし、ジョゼフに鍵を拾わせることによって彼の髪にさわるのである。ここでもまたジョゼフは憤怒にかられ、「どうしてぼくにさわったんだ(Pourquoi m'avez-vous touché?)」(p.172) と大声を張りあげている。つまりキリグルーが手に触れたときに言ったのとほぼ同じことばを発するのだ。そしてジョゼフは形相を変え、欲望にたけり狂った顔つきでモイラにせまっていく。髪にさわられたことがきっかけとなって、それまで抑えつけられてきた欲望が堰を切り、氾濫するわけである。モイラと肉体の交わりをむすぶにいたる、こうしたいきさつを視野に入れると、キリグルーが手に触れた際のジョゼフの怒りは、欲望がいや応なく目覚めさせられることへの反応だと解することができよう。したがって、キリグルーの行為はジョゼフの純粋志向・ピュリタニスム的態度を浮き彫りにするだけではない。キリグルーはモイラの話をすることによってと同様、ジョゼフの手にさわることでも、ジョゼフを肉なるもののほうに傾斜させているのである。

(4) デア夫人の下宿に集まる学生たち

こんどはデア夫人の下宿に集まる不特定の学生たちの動きをみてみることにしよう。第一部第九章、ジョゼフがデア夫人の下宿に逗留しているとき、マック・アリスターをふくむ、隣室の学生たちが性にかんするみだらな話をかわし、ジョゼフを赤面させている。ジョゼフのうけた衝撃の深さは、「これらのことばは無慈悲なまでに正確な一連の映像をかたち作って、永遠にそこから動くまいとでもするように、彼〔ジョゼフ〕の記憶の中にやどった。(…)不意に彼は自分の中に悪魔が巣くっているのを感じた」(p.44) と語られているところからうかがうことができる。また第二部第一章、マック・アリスターに暴力をふるった同じ日の晩、ジョゼフは隣室の学生たちの話し声に眠りを妨げられている。集まりの中にはマック・アリスター、キリグルーもまじっているが、学生たちは淫売宿の話をし、性

体験をした者の認定をし、ジョゼフをやり玉にあげ、「あいつ〔ジョゼフ〕にまいってしまわない女にお目にかかりたいよ。(…)いいかい、やつはこうやって女の腰を抱きしめるんだ…」(p.92) などと言い、ジョゼフの肉欲について色々とあげつらうのである。このような性と肉体にかんする淫猥な会話はもちろんジョゼフに反感をいだかせる。しかし学生たちの会話がジョゼフを反撥させるとしても、同時にジョゼフの記憶のなかに鮮明にのこり、ジョゼフを肉なるものに呪縛する作用を有することは打ち消しがたい事実なのである[35)]。

第二部第十三章で、キリグルーの口から漏らされる、学生たちの陰謀についても言及する必要があるだろう。陰謀とは、品行のよくないモイラをジョゼフのところにやって、ジョゼフを誘惑させ、そうすることでジョゼフを物笑いの種にするというものである。モイラは学生たちのくわだてに同意し、ジョゼフを誘惑する役をひきうける。作品の後の展開を考慮すれば、この陰謀がジョゼフとモイラとの結びつきを不可避的に生じさせ、ジョゼフを肉なるものに直面させることは言を俟たない。このように、デア夫人の下宿に寄り合う学生たちは、卑猥な会話と陰謀とによってジョゼフを肉体的なもののほうにけしかけ、また陰謀によって、ジョゼフをモイラに結びつける役割をはたしているのである。

(5) ジュマイマ

デア夫人の下宿の女中ジェマイマは第二部第二章、ジョゼフの部屋を掃除しにくるというかたちをとって登場する。このとき、ジェマイマはデア夫人の養女のモイラのことを口にする。女中は、ジョゼフの使用している部屋が以前、モイラのものであったことを伝えるとともに、「モイラお嬢さまはきれいな方ですよ。ただお嬢さまにはお考えがおありなのです。それにほかのこともありますし…」(p.97) と教える。この話はモイラにたいする興味・好奇心をひきおこさずにはおかない。実際、第二部第九章で、「《モイラお嬢さまはきれいな方ですよ…》年とった女中のこの月並みなことばが格別の魅力を付与されて、彼の脳裡にうかんだ。心ならずも彼はモイラのことを思い浮かべようとした」(p.117) と語られているように、ジョゼフは女中のことばを思い出し、まだ見たこともないモイラのことを想像しようとしている。またジェマイマの話の中で、「ただお嬢さまにはお考えがおありなのです。それにほかのこともありますし…」という部分はモイラの放縦・不品行を示唆するのであろう。けれども意味内容が不鮮明であるがゆえに謎をのこし、モイラへの関心をいっそうそそっていると思われる。とはいえ、第二部第二章のジェマイマの話のうちでとりわけジョゼフの注意をひくのは、ベッドにかんする言及である。「モイラお嬢さまがいらっしゃったころは、ベッドはほとんど部屋の

真ん中にあって、すこし斜めに置かれていました」(p.96)、「ただお嬢さまは、ベッドがほとんど真ん中にあって、すこし斜めになることを望まれるのです」(p.97)というように、ジェマイマはベッドの置き方についてのモイラの習慣のことを繰りかえし語っている[36]。この話はジョゼフに衝撃をあたえ、ジョゼフは女中が部屋を立ち去ったあと、ベッドをしげしげとみつめ、「自分が眠っているベッドの中で、彼女〔モイラ〕もまた眠ったのだ」(II−3、p.97)と考えている。ここにおいてベッドはジョゼフとモイラとのつながりを密接なものにしているといえるが、さらに、ジェマイマから話をきいた日の晩、ジョゼフはモイラがかつてそうしていたように、ベッドの位置をかえて身を投げるのである。このくだりは次のようにえがかれている。

「主の祈りをとなえている最中に、ベッドの位置を変えようという奇妙な考えが心に浮かんだ。どうやってみても、その考えは彼〔ジョゼフ〕を支配した。(…)一瞬のち、かれは立ち上がり部屋の中央にベッドをひっぱり、暖炉とドアから等距離のところに、斜めに置いた。(…)ベッドを一周したあと、彼はおずおずとした、それでいて愛撫するような仕草で、枕とシーツの上を指先でそっとなでた。突然、彼はその狭い寝床の上に身を投げた。するとバネが体の重みのためにきしんだ。彼は長々と体をのばした」(II−6、p.106)。

この一節で、かつてモイラが置いていたのと同じ場所に、ジョゼフがベッドを置きなおしていることは一読して明らかである。ベッドの位置をかえるという行為から、まだ見ぬモイラへの思いにジョゼフがとらえられていることがわかる。しかも、ベッドの位置をかえるという考えが、主の祈りをとなえるという宗教的な実践のただ中で生じていることから、モイラへの思いは信仰を圧倒するほどまでにもたげたのだとみなされよう。また、ジョゼフがベッドに身を投げる寸前、「おずおずとした、それでいて愛撫するような仕草」で枕とシーツをなでている点は注目される。ジョゼフの仕草はまぎれもなく érotique ないろどりを帯びている。置きかえられたベッドは枕やシーツとともに、モイラの代用物となっているのではないだろうか。ジョゼフがベッドに身を投げるとき、モイラと合体したいという欲求が、あるいはモイラのからだを所有したいという欲求がジョゼフをうごかしていると推察されるのである。このようにベッドは、モイラへの肉体的欲望をひき起こすにいたるまでに、ジョゼフをモイラのほうに誘引しているのだ。女中ジェマイマはモイラのことや彼女の習慣のことを話すことで、ジョゼフをモイラのほうにみちびくばかりではなく、肉なるもののほうへ追いやる機能をはたしているといえるのである。

（6）ファーガスン夫人の下宿の女中

ファーガスン夫人の下宿の女中が出てくるのは、第二部第十三章においてである。この章では、学生たちの陰謀を伝えるためにやってきたキリグルーとジョゼフとの会話が中心として語られる。だが途中、女中がジョゼフの部屋に入ってき、冬の寒さにそなえて追加の毛布を置いていくところがある。この場面は次のように書かれている。

「(…)ドアがあいて、黒い服を着、足もとまで垂れさがる白いエプロンを腰にしめた年とった黒人の女が中に入ってきた。(…)彼女は四つに丁寧に折りたたんだ灰色のぶあつい毛布を腕をのばしてかかえていた。

——追加の毛布がお入り用になるだろうって、ミセス・ファーガスンがおっしゃいましたもので、と彼女は重い荷物をベッドの上に置いて言った」(p.137)。

キリグルーとジョゼフとの会話の合間にさりげなく挿入されたこの場面は、のちに重要な意味をもつことになる。女中が運んできた「灰色のぶあつい毛布」は第二部第二十二章において、ジョゼフがモイラを殺すときに利用されることになるからだ。ジョゼフはモイラと肉体のあやまちをおかしたのち、しばらく寝こみ、目をさましたとき傍らに幸せそうに眠っているモイラをみいだす。そこでジョゼフは怒りにかられてモイラを絞め殺すのである。少し長いがモイラ殺害の場面を引用しておこう。

「——起きろ！　と彼〔ジョゼフ〕は命じた。

彼女は手の甲を顔のところにもっていき、半ば目をあけた。

——寒いわ！　と彼女はつぶやいた。

——寒いだと、と彼は声を変えて言った。

そして床の上にすべり落ちた灰色のぶあつい毛布を両腕をいっぱいにひろげて拾い上げ、急に若い女の顔の上に押しつけた。モイラは体を突然おどり上がらせたので、危うくベッドの外に投げ出されそうになった。だがジョゼフは全力でその大きな毛布のかたまりの下に彼女を抑えつけた。その毛布のかたまりの下からは、子どもの叫びに似たうめき声がきこえてきた。

——寒いだと！　と彼は憤然として繰りかえした。寒いだと、モイラ！

小さな体が異常な激しさで一方から他の方向に向いた。非常な力が不意にモイラの体を動かしたので、ジョゼフはモイラの体が自分の手から逃がれるのではないかと心配した。それで彼は両手をとても深く毛布の中に押し込んだ。そのため両手で毛布の厚みの下の顔かたちがみとめられた。

彼は、彼女の上で体を曲げて、苦しそうに息をしていた。(…)彼女がまった

く動かなくなったとき、彼は深い溜息をつき、毛布をひきはがした」(pp.173-4)。

この場面を読んでわかるように、ジョゼフは、第二部第十三章で女中がもってきた「灰色のぶあつい毛布」をモイラ殺害のための道具としている。もっとも、ジョゼフは最終的にはモイラの首をしめて殺すのであり、必ずしも毛布がなくてもジョゼフの犯罪はなされていたかもしれない。しかし上の場面において、ジョゼフはまず毛布をモイラの顔の上におおいかぶせて、顔を見えなくするとともにモイラを動きにくくし、そして息苦しくし、そのあとで首をしめている。この一連の行動ははっきりとした意図をもってなされているとは考えにくい。むしろジョゼフは肉体の誘惑に負けたことへの怒りと絶望に支配されて、半ば無意識のうちに行動におもむいているとみるべきだろう。とすれば、モイラの顔に押しつけた毛布が首をしめるという次の行為をうながし、あるいは誘導しているともいえる。したがって、「灰色のぶあつい毛布」はジョゼフの犯罪をひき起こしているし、と同時に、ファーガスン夫人の下宿の女中は追加の毛布をもってくることによって、ジョゼフを犯罪のほうにみちびいていると断定することができるのである。

以上、デア夫人、マック・アリスター、キリグルー、デア夫人の下宿に集まる学生たち、ジェマイマ、そしてファーガスン夫人の下宿の女中がはたす役割について検討してきた。ここでこれらの人物たちの役割をまとめておこう。デア夫人はその厚化粧のためにジョゼフを肉体的なもののほうへ惹きつけているし、シガレットケースへの言及によってモイラのほうにいざなっている。マック・アリスターはその挑戦的姿勢と『ポリス・ガゼット』の雑誌をみせることによって、ジョゼフを肉なるもののほうへまねいている。キリグルーは肉体の問題について話し、『ロメオとジュリエット』の曖昧な箇所の意味を教え、そしてジョゼフの手に触れることで、ジョゼフの純粋志向・ピュリタニスム的態度を浮き彫りにするとともに、ジョゼフを肉なるもののほうへ誘導している。また、モイラの話をすることによってもジョゼフを肉体的なもののほうへ向かわせている。デア夫人の下宿に集まる学生たちはみだらな会話をかわし陰謀をくわだてることによって、ジョゼフを肉なるもののほうへ駆りたて、さらに陰謀によっては、ジョゼフをモイラに結びつける役割をはたしている。ジェマイマはモイラのことや、ベッドにかんする彼女の習慣のことを話すことで、ジョゼフをモイラのほうにみちびき、と同時に、肉なるもののほうへ追いやっている。そしてファーガスン夫人の下宿の女中は追加の毛布を提供することでジョゼフを犯罪のほうに押しやっている。このように、ジョゼフとの関係においてそれほど重要性をもたない、これらの人物も

また、ことごとくジョゼフの生の歩みになんらかの影響をおよぼし、ジョゼフの運命の形成に貢献しているのだ。こうした中でモイラと遭遇したジョゼフが結局モイラと肉体の罪をおかし、モイラを殺すにいたるのは必然の成り行きだといえるのである。

5．モイラ

さいごにモイラの役割を検討しておきたい。モイラが肉なるもののほうにジョゼフをいざなっていることは火を見るよりあきらかであるが、ここではモイラがいかなるかたちでジョゼフを誘惑しているかをみていくことにしよう。

モイラが実際にジョゼフの前にはじめてあらわれるのは、第二部第十章においてである。ファーガスン夫人の下宿にかわったジョゼフは、セーターをもとの下宿に置き忘れてきたことに気づき、早速デア夫人のところにおもむく。このときジョゼフは、郷里の実家にもどったばかりのモイラに出会うのである。この出会いの場面で、ジョゼフはまずモイラの赤い服に注目している。

「彼〔ジョゼフ〕は彼女〔モイラ〕をみた。彼女は赤い服を着ていた。くすんだと同時に強烈な赤の服だったが、それは彼に衝撃を与えた」(p.121)。

赤い服とともに赤い唇もまた、ジョゼフの注意をひいている。ジョゼフはモイラの白い顔色、青い目、きめ細やかな肌を観察したあと、どぎつく口紅を塗った唇を注視するのだ。ジョゼフの視線をとおしてみられた、モイラの赤い唇は次のようにえがかれている。

「(…)口はあまりにも赤く、ほとんど荒々しい勢いで塗りたくられていた」(p.122)。

このように、ジョゼフはモイラの赤い服と赤い唇をみとめている。そして、この赤い服と赤い唇はその色彩によってジョゼフに強烈な印象をあたえ、ジョゼフの記憶のなかに生々しくとどまることになる。事実、第二部第十一章、モイラとわかれてチョーサーの授業に出た際、ジョゼフはモイラのことを考え、「黙示録に出てくる淫売婦のように赤い服を着、唇を塗りたくって」(p.125)と述べられているように、モイラの赤い服と赤い唇を思い出している。また第二部第十二章では、「彼女〔モイラ〕があまりにぴったりと体の線を出した服を着ていたので、彼女の体のある部分がはっきりとみえたことを思い出すのだった。しかも服の赤いことが、そのみだらさをいやましているのだった」(p.128) と語られているように、ジョゼフはモイラのみだらな服の着こなしとあわせて、赤という服の色彩を思い浮かべている。さらにまた、第二部第十四章で、ジョゼフはデーヴィドと講義に

行く途中、大通りでモイラとすれちがい、このあとモイラのことを話題にし、「君は、彼女がどれだけ口紅を塗りたくっているか、気付いたかい？　彼女の口ときたら…」(p.140)とデーヴィドに問いかけている。このことばは、モイラの赤い唇がいかにジョゼフに衝撃をあたえ、いかに彼の記憶に鮮明に焼きついているかを端的に示している[37]。ジョゼフにとって〈赤〉が情欲のシンボルであり、みだらな、煽情的な色彩であることは論を俟たない。それゆえ、赤い服、赤い唇はジョゼフにおいて、モイラの肉体性・官能性をひき立たせるものとして意識されているのである。

赤い服、赤い唇と同様に、リラの香水の匂いもまた、モイラの肉体性・官能性を浮き彫りにしているのではないだろうか。第二部第十章の最初の出会いの場面において、リラの香水の匂いは次のようにえがかれている。

「その部屋の中には、おそろしく心地よくて人を酔わせるような匂いが漂っていた。彼〔ジョゼフ〕はその匂いを吸いこまないようにした。それはリラの匂いだった」(p.122)。

また、モイラがジョゼフを誘惑するため彼の部屋にやってきた、第二部第二十一章の場面でも、リラの香水の匂いはジョゼフに感じとられている。

「突然、彼女のつけている香水の匂いが彼のところまで漂ってきた。ごくかすかなリラの匂いだった。しかしそれはあまりにも微妙だったので、すぐに宙に消えてしまった。けれども彼はこの匂いに気づき、快楽と、この快楽によってひき起こされるいら立ちとの入りまじった奇妙な感情をおぼえた」(p.165)。

このように、ジョゼフはモイラのからだから発散するリラの香水の匂いを嗅ぎわけている。このリラの香水の匂いは、「おそろしく心地よくて人を酔わせるような匂い」をしているところからわかるように、官能的なよろこびにいざなうものである。ジョゼフがこの匂いを「吸いこまないようにした」り、この香りに「快楽」をおぼえながらも同時に「いら立ち」の念をいだくのは、肉体的な快楽、もしくは肉なるものにたいする反撥の力が咄嗟にはたらくからにほかならない。かくしてリラの香水の匂いはモイラの肉体性・官能性を際立たせているといえるし、モイラは赤い服、赤い唇によってと同じくリラの香水の匂いをただよわせることによっても、ジョゼフを肉なるもののほうにまねいているとみなされるのである。

第二部第十章の出会いの場面で、ジョゼフがかつての自分の部屋、そして今はモイラのものとなった部屋のなかに、モイラの衣類が乱雑に放り散らかされているのを目撃するところは注意を払うべきだろう。

「おずおずと彼〔ジョゼフ〕は彼女〔モイラ〕のあとについて部屋にはいった

が、洋服や帽子やボール箱が山ほど積まれていたので、家具を見わけるのに苦労した。白い絹のブラウスが揺り椅子の上で一種みだらな様子で腕をひろげていた。そしてまだ乱れているベッドのまん中には、肌色の靴下とピンク色をしたネグリジェとが山積みに放り出されていた。彼はぞっとして目をそらせた」(p.122)。

ここで直ちに気づくことは、モイラの衣類がかもし出す官能的な雰囲気である。揺り椅子の上に置かれた白い絹のブラウスはまるでジョゼフを肉なるものに迎えいれるかのように、「一種みだらな様子」で「腕をひろげてい」るのだ。ブラウスはそのならべ方のみだらさによって官能的な雰囲気を醸成している。とはいえ、このブラウスにもまして重要なのは、乱れたベッドの上に置かれた、肌色の靴下とピンク色のネグリジェであろう。これらの下着類は、その érotique な色彩のために、そしてまた、それが素肌にじかにふれ、それを身につける人の肉体を連想させるという理由のために、いっそう官能的な雰囲気をもり上げている。そしてこれらの下着もまた、モイラの肉体性・官能性と密接に関係するがゆえに、ジョゼフをモイラのほうに、あるいは肉なるもののほうにいざなっているにちがいない。ジョゼフが「ぞっとして目をそらせ」るのは、これらの下着をとおして肉なるものの誘惑を感じとったからにほかならない。したがって、モイラは肌色の靴下とピンク色のネグリジェをみせることによっても、ジョゼフを肉なるもののほうにまねいているのである。

はじめての対面の場面で、モイラがジョゼフの置き忘れたセーターを手渡すのではなく、床の上に投げつけるという事実もまた看過できないように思われる。モイラは床の上に投げたセーターを片足でジョゼフのほうに押しやりながら、「これ、あたしの靴をふくぼろ屑かと思ったわ」と皮肉り、「何をぐずぐずなさっているの？　それ拾ってお帰りなさい」と言うのである(p.123)。モイラが高飛車な態度をとったことにたいして、ジョゼフは当然はげしい怒りをおぼえる。「急に彼は心に憤怒を感じながら、その女〔モイラ〕の前で二つに身を折った。セーターをつかんだ拳がぴくぴくとふるえていた」(p.123)と書かれているように。ここでの手の痙攣がジョゼフの内心の激怒を浮き彫りにしていることは言うまでもない。そしてモイラの前で屈辱的な姿勢をとったことで生じた怒りは、こののちジョゼフの内心で反芻されることになる。第二部第十四章において、モイラと大通りですれちがったあと大学構内でプレローをみかけた際、ジョゼフは、「ぼくがセーターを取りに行ったとき、それがプレローだったら、彼女〔モイラ〕だってぼくにきいたような口のきき方をする勇気はなかっただろう」し、「それに彼ならけっして彼女の前で身をかがめたりはしなかっただろう」と考えているように、モイラの

横柄な態度と自分の受けた屈辱を思い出して、「怒りの発作」にかられている(p.140)。また第二部第十一章、チョーサーの講義をきいている最中、モイラの横柄さと自分のふるまいが忘れられず、憤りの感情に揺りうごかされている。

「あの小柄な、誇り高くて横柄な女、それがまさしく彼女〔モイラ〕なのだ。(…)彼はセーターを拾うため、彼女の前で背中を曲げている自分の姿を思い出した。(…)彼女を殴り、罰したなら、そうだ、彼女の傲慢さを罰したなら、なんという恐ろしい悦びであることだろう。こう考えると血が頭にのぼってくるのだった」(p.125)。

ここではジョゼフは、激昂のあまり暴力への欲求にかられている。この暴力への欲求は怒りの感情とともに、肉体的な欲望と結びついているのではないだろうか。ちょうどプレローにたいする怒りと暴力への欲求が愛の欲望の屈折したはけ口であったように。さいごの「血が頭にのぼってくるのだった」という文章は、ジョゼフが肉体ないし欲望のエネルギーに支配されたありさまを示していると思われる。かくしてジョゼフはモイラにたいして怒りをおぼえ、暴力への欲求にとらえられることで、モイラにどうしようもなく執着し、モイラへの情熱に隷従してしまうのである。のちに、「怒りに胸をふくらませて、セーターを拾うため彼女の目の前で身をかがめたまさにその瞬間、彼にはすでにもう自分の自由というものがないのだった」(II-18、p.150) と振りかえられるように、モイラに怒りの感情をいだいたことが、モイラとの結びつきを決定的なものにしてしまうのだ。それゆえ、モイラはセーターを床に投げつけることによっても、ジョゼフを肉なるもののほうに向かわせているのである。

ではこんどは、第二部第二十一章における誘惑の場面を分析することにしよう。すでにふれたように、モイラは学生たちのたくらんだ陰謀に加担し、ジョゼフを誘惑するためジョゼフの部屋に闖入する。二人のやりとりのなかで、ジョゼフの部屋の鍵が重要な役割をはたしていることに気づく。まず部屋にしのび込んだモイラは、ジョゼフがもどってきたのをみとどけてから、ドアに鍵をかけ、「ドレスの胸の切り込み」の中に鍵をすべりこませる(p.162)。モイラが鍵を胸の奥にしまいこむのは、もちろん、鍵をジョゼフに渡さないようにするためであり、また、部屋を閉めきって部屋から追い出されないようにすること、ジョゼフを部屋にとじこめて二人きりで時をすごすことを目的としている。「出て行って下さい」と言うジョゼフにたいして、モイラは次のように答えている。

「もちろんだめだわ。だってそうでしょう。だいいち、あたしを出て行かせるには、あなたの鍵を、あたしが置いたところから取りかえさなくてはならない

のよ(彼女は胸に手をあてた)。あなたにはそんな勇気はないと思うわよ」(p.162)。

こうしてモイラはジョゼフの部屋に居すわることになる。ジョゼフはモイラの存在を無視することによって、自発的にモイラを部屋から出て行かそうとする。モイラのほうははじめのうちジョゼフに話しかけ、自分に関心を向けようとする。だがまともに相手にされないので、仕方なく友人のセリナあてに手紙を書くことで時間をつぶす。手紙を書きおえたあと、モイラは誘惑することを断念し部屋を立ち去ろうとする。ところがドアのそばで胸から鍵を取りだそうとしたとき、鍵がすべって床の上に落ちる。モイラは、「さあ、鍵を取ってちょうだい」(p.172)と言って、ジョゼフに鍵を拾わせようとする。ジョゼフはモイラの前で身をかがめる。そのときモイラがジョゼフの髪に手をやる。するとこのことが引き金となって、これまでジョゼフの内部で抑えられてきた欲望が堰を切り、氾濫する。ジョゼフはけだもののようにモイラのほうにせまり、モイラと肉のあやまちをおかすにいたるのである。

モイラがジョゼフの部屋にしのびこんでから、二人が性の交わりをむすぶまでの経過をごく簡単にたどってきた。ここから、鍵がジョゼフとモイラの二人を結びつけるはたらきをしていることがわかる。まず、モイラが部屋に鍵をかけたことによって、鍵は、ジョゼフがモイラから離れられないようにしているし、また章の終わりのほうで、モイラが胸から床の上にすべり落とした鍵は、ジョゼフとモイラを最終的に結びつけるきっかけを作っている。なぜなら、ジョゼフの突然の変貌をもたらす直接の原因は、モイラがジョゼフの髪にふれたことにあるとしても、この行為を誘発するのは床の上に落ちた鍵であるからだ。

けれども、第二部第二十一章における鍵の機能はこうした点だけにとどまらない。鍵はモイラの胸の奥にしまいこまれることで、意外な効力を発揮している。何よりもまず、鍵は誘惑の道具となっているのではないだろうか。この点にかんして、モイラは鍵を胸の奥にかくした直後、「肌の上にこの鍵を押しあてているとへんてこな感じがするわね。鍵は燃えているようで、同時に凍てつくようだわ。ちょっとあなたのようだわ」(p.163) とジョゼフに言っている。ここでモイラは、ジョゼフが鍵をほしがっていることを前提にしたうえで、鍵が自分の胸の肌にじかに接触していることを知らしめ、そして、鍵が燃えるようで冷たい感じを与えることから、鍵をジョゼフになぞらえている。胸に押しあてた鍵をジョゼフに比較することによって、モイラはジョゼフを肉体的に誘惑しているのではないだろうか。また、鍵を胸の中に入れることで、モイラはジョゼフをいや応なく肉体の試練にかけているといえよう。というのも、鍵を手に入れるためには、モイラの

肉体にさわることは避けられず、ドレスの下にかくれたからだの一部分をあらわにすることを余儀なくされるからだ。こうして鍵を取りもどそうとすることは、欲望に屈服する危険性をはらんでいるのだ。モイラはセリナあての手紙のなかで、「あたしはかなり粗暴な獲物を相手にするということがわかっていたので、部屋に鍵をかけ、胸の中に鍵を入れたのよ。実際、もしもそんなとこをひっかきまわせば、彼はもうおわりだということがわかっていたから」(p.167) と書いている。この文章から、モイラが胸の中から鍵を取り出すことの意味を承知したうえで鍵を胸の奥にしまいこんだことがわかる。とすれば、モイラが鍵をジョゼフになぞらえるところは明らかに誘惑の場面であるといえるし、鍵が誘惑の道具として利用されていることは容易に理解されるのである。

また、鍵はモイラの胸の奥にしまいこまれることで、ジョゼフにモイラのからだを想像させている。ジョゼフはモイラを無視・黙殺することによって、モイラを部屋から出て行かせようと決心する。このときの心の動きは次のようにえがかれている。

「彫像のようにここでじっとしていよう。彼女〔モイラ〕がそういう自分をみることに飽き飽きするまで。そうすれば彼女は出ていくだろう。彼女はあの鍵を、しまった所から、ドレスの胸の切れ込みの中、二つの乳房のあいだから取り出すことだろう」(p.170)。

このように、モイラが部屋を立ち去るところをジョゼフが思いうかべる部分で、鍵はドレスの胸の切れ込みにあることから、モイラの乳房を連想させている。ここでは鍵はモイラの肉体を想像させるがゆえに、ジョゼフの欲望をつのらせるはたらきをしているのである。さらに、鍵は章の終わり近くでは、モイラのからだを感じさせるものにもなっている。モイラが鍵を床の上にすべり落とし、ジョゼフがその鍵を拾うことはすでに述べたけれども、このとき、「彼は彼女のまえに身をかがめた。そして手で鍵をつかんだ。鍵はまだ彼には大変あたたかいように思えた」(p.172) と語られているように、鍵はモイラの肌のぬくもりをつたえている。鍵はモイラのからだを感じさせることでもジョゼフをモイラのほうにみちびいているのである。つまり鍵はジョゼフとモイラを二人きりにし、二人を最終的に結びつけるきっかけを作るばかりではなく、誘惑の道具として役立ち、また、モイラの肉体を想像させ、あるいは感じさせるものともなっている。鍵は第二部第二十一章において、様々な点からジョゼフをモイラに結びつける役割をはたしているのである。ここから、モイラはジョゼフの髪にさわることによってと同様、鍵を胸の中にしまいこむことでもまた、ジョゼフを肉なるもののほうに誘導してい

るといえるのである。

ここまで、第二部第十章の出会いの場面と第二部第二十一章の誘惑の場面とを取りあげて、モイラがジョゼフを肉なるもののほうにいざなうありさまをみてきた。そしてモイラが赤い服と赤い唇、リラの香水の匂いによって、下着をみせることによって、また、ジョゼフのセーターを床の上に投げすてることによってジョゼフを肉なるもののほうにみちびいていること、決定的な局面では、鍵を胸の奥にしまいこみ、ジョゼフの髪にふれることでジョゼフを肉なるもののほうにまねいていることを指摘した。さいごにモイラとジョゼフの犯罪との関連性を考察しておきたい。モイラはセリナあての手紙のなかで、「あたしは楽しむための機械であることはもう沢山だわ。(…)あたしのほうこそ、恋をしているのよ」(II-21、p.169)と書いているように、ジョゼフと性の交わりをむすぶ直前、過去のふしだらなおこないを反省するとともに、ジョゼフへの愛を自覚するにいたっている。また、「彼女〔モイラ〕は彼〔ジョゼフ〕が認めなかったような品位をそなえていた」(II-21、p.162) という文章からうかがえるごとく、モイラは肉体だけでなくたましいをも持ちあわせた一人の女性なのだ[38]。しかしジョゼフの目には、モイラは肉ないし肉欲の化身としてしかうつらない。だからこそジョゼフはモイラを殺害するのであろう。なぜなら肉あるいは肉欲は、純粋志向・ピュリタニスム的態度を有するジョゼフにとって、悪なのだから。モイラはもっぱら自己の肉体的側面をジョゼフに意識させたがゆえに、ジョゼフの犯罪を招来したといえるかもしれない。つまりモイラは自己の肉体性・官能性を故意に際立たせることによって、ジョゼフを肉なるものと同時に犯罪のほうにもみちびいていると解することができるのである。

6．おわりに

以上のように、ジョゼフを取りまく人物たちがジョゼフにいかなる影響をおよぼしているかを考察してきた。ここで、おのおのの人物がはたす役割をもう一度要約しておこう。プレローは挑戦と決闘とによって《violence》をめざめさせたという点で、ジョゼフを肉なるものと同時に犯罪のほうに向かわせている。サイモンはギリシャの神々の彫像に注意をうながし白い木蓮の花をおくることによって、およびその死によって、ジョゼフを肉体的なもののほうにまねいている。デーヴィドは世界観・宗教観の差異によって、また無能な confesseur であるために、ジョゼフを肉なるもののほうへ押しやり、さらにシェークスピアの書物を贈り、シャ

ベルの置いてある黒い板小屋をみせることでジョゼフの犯罪すらもひき起こしている。デア夫人はその厚化粧ゆえにジョゼフを肉体的なもののほうに惹きつけ、シガレットケースへの言及によってモイラのほうにいざなっている。マック・アリスターはその挑発的な姿勢と『ポリス・ガゼット』の雑誌をみせることによって、ジョゼフを肉なるもののほうにひき寄せている。キリグルーは肉体の問題やモイラのことについて話し、『ロメオとジュリエット』の曖昧な箇所の意味を伝え、あるいはジョゼフの手に触れることでジョゼフを肉なるもののほうに誘引している。デア夫人の下宿に集合する学生たちは卑猥な会話をかわし陰謀をくわだてることで、ジョゼフを肉なるもののほうにあおり立て、また陰謀によってジョゼフとモイラとのつながりを断ちがたいものにしている。ジェマイマはモイラのこと、とくにベッドにかんする彼女の習慣のことを教えることで、ジョゼフをモイラのほうにかり立てるとともに肉なるもののほうにおいやっている。ファーガスン夫人の下宿の女中は追加の毛布の供給によってジョゼフを犯罪にみちびいている。そしてモイラは赤い服と赤い唇によって、リラの香水の匂いをただよわせ、肌色の靴下とピンク色のネグリジェをみせ、またジョゼフのセーターを床の上に投げることによって、さらに決定的な局面では、鍵を胸の中にかくし、ジョゼフの髪にふれることによって、ジョゼフを肉なるもののほうにまねいている。あわせてモイラは自らの肉体性・官能性をことさらひき立たせたがゆえにジョゼフの犯罪を招来している。このようにジョゼフを取りまく人物たちは多かれ少なかれジョゼフの生の歩みに影響をおよぼし、その悲劇的な結末にむかってジョゼフを誘導しているのである。

同じことは、ジョゼフの周囲に存在する様々な事物についてもいえるのではないだろうか。ファーガスン夫人の下宿の女中が持ってきた追加の毛布や、『オセロ』が収録されたシェークスピアの本、それにファーガスン夫人の家の庭の黒い板小屋に置いてあるシャベルは明らかにジョゼフを犯罪のほうにみちびいている。また、デア夫人が言及したシガレットケース、ジョゼフがデア夫人のところに下宿しているときの部屋の中のベッド[39]、ジョゼフがデア夫人の下宿の部屋に置き忘れてきたセーター[40]はジョゼフをモイラに結びつけるはたらきをしているし、モイラの煽情的な赤い服、ジョゼフがモイラのベッドの上にかいまみた肌色の靴下とピンクのネグリジェ、そして第二部第二十一章でモイラが誘惑の道具として用いる、ジョゼフの部屋の鍵は、肉ないし肉欲の化身としてのモイラのほうにジョゼフをいざなっている。さらに作品第一部では、様々な事物がジョゼフを肉体的なもののほうに向かわせている。すなわち、大学構内の建物の玄関前を歩いている際、

サイモンがジョゼフに注意をうながしたギリシャの神々の彫像、ジョゼフが自室と洋服屋で自分の顔がうつっているのをみた鏡(Ⅰ-9、p.41；Ⅰ-11、p.57)[41]、サイモンがジョゼフにおくった白い木蓮の花、意味不明の箇所が卑猥なことを暗示しているのを聞き知ってジョゼフがひき裂いた『ロメオとジュリエット』の本、およびマック・アリスターの読む『ポリス・ガゼット』の雑誌がそれである。これらのものがジョゼフを肉なるもののほうにいざなっていることはすでにみた。また、第一部第四章の「大学の地図」(p.19) も同様の機能をはたしているのではないだろうか。この地図をたよりに、ジョゼフはプレローの住まいにおもむき、プレローと決闘し、《violence》を発現させるにいたるのだ。とすれば、この大学の地図はプレローへの暴力をひき出したという意味で、ジョゼフを肉なるもののほうへみちびいているといえよう。同じように、第一部第五章の林間の空地に落ちた太い木の枝も、大かえでの樹の幹をたたきまくるという行為をひき起こしているがゆえに、つまり《violence》を顕在化させているがゆえに、ジョゼフを肉なるもののほうに誘導している。さらにまた、ジョゼフがマック・アリスターに暴力をふるう際に用いる、腰にしめた黒いベルトも、同じはたらきをしているとみなされる。このように、ジョゼフの周囲に存在する様々な事物は、彼を取りまく人物たちがそうであるように、ジョゼフを肉なるもののほうに、あるいはモイラのほうに、あるいは犯罪のほうにみちびいているのだ。それゆえ、ジョゼフの運命は、ジョゼフを取りまく人物たちと、ジョゼフの周囲に存在する様々な事物とによってかたち作られているのである。私たちはこの点にこそ、『モイラ』が提示する〈宿命〉の世界の構造を、言いかえれば、作品を支配する宿命性の具体的なあらわれをみることができるのである。

小説『モイラ』がジョゼフの悲劇的な生の歩みを語ることをとおして問題とするのは、人間が個人的な意思や努力によって自らの進路を切り開くのではなく、個人を越えたあらがいがたい力、つまり宿命に支配され、盲目的にしたがって生きなければならないという点であろう。換言すれば、人間は自らに課せられた不可解な運命にたいして徹頭徹尾、無力であるという点であろう。この点、『モイラ』は、『ヴァルーナ』(1940) の中の次のことば、すなわち、「私は、われわれが盲目で、聾であって、われわれの運命について何ら理解することなく、夜から来て夜にもどるのだ」[42]ということばに書きこまれた運命観を反映しているといえよう。グリーンは『日記』のなかで、「われわれは、作者の欲することをかならずしもよく理解しない小説の中の人物なのだ」[43]と述べている。ここで言う「小説」の「作者」が神であることは疑いを容れない。『モイラ』はまた、こうしたグリーンの人

間観によって裏打ちされているにちがいない。作中、ジョゼフは「自分の人生にまじり合う人間たちはすべて神によってつかわされたのだ」(Ⅰ−3、p.10)と考えているが、この考え方は作者グリーンも共有しうるであろう。したがって、ジョゼフの悲劇的な運命は結局、神の意志のあらわれにほかならないという理解が作品の根底に横たわっていると思われる。そしてジョゼフの救いを希求しうるのも、まさしくここからなのである。

私たちはこの小論において、宿命性の表現を基本的にジョゼフの〈外側〉から検討してきた。しかしながら、問題はそれほど単純ではない。というのも、ジョゼフの悲劇的な生の歩みは、ジョゼフの純粋志向・ピュリタニスム的態度、さらには彼の《violence》とも深く関連し、いわば内的な必然性(fatalité)を帯びているようにもみえるからだ。それゆえ、ジョゼフの〈内側〉に焦点をあわせて作品を読解することがどうしても必要になってくるのである。今後の課題としたい。

註

27) 目次の0．1．2．3．に該当する部分は、『ジョゼフを取りまく人物たち(1)—ジュリアン・グリーンの『モイラ』について—』、山口大学「文学会志」第39巻、1988、pp.51–71を参照。

28) 女中 Jemima が部屋から出ていったあと、Joseph は、「自分がここに着いた日に見たあのシガレットケースは、彼女〔モイラ〕のものだったのだ」と考えている(Ⅱ−2、p.97)。

29) 遠藤周作：「情慾の深淵」(『カトリック作家の問題・宗教と文学』所収)、「遠藤周作文学全集」第10巻、新潮社、1975、p.64。

30) すでにふれたように、Simon は Joseph にたいして同性愛の感情をいだいている(『ジョゼフを取りまく人物たち(1)』、p.62および p.71の註21を参照)。

31) 強調は引用者、以下同様。

32) Joseph の恋愛感情について大ざっぱにいえば、作品第一部においては Praileau が Joseph の意識を支配し、第二部では Moïra が Joseph の思いを占めるのである。

33) Killigrew は、第二部第一章、Joseph の隣室に集まった学生たちとの会話のなかで、Joseph のことを話題にし、「彼だって肉と血でできている、ぼくらと同じようにね。ただ彼はおくてなんだ、それだけのことだよ」とも言っている(p.91)。

34) この点にかんしては、次章(「5．モイラ」)のさいごのところでふれる。

35) 『モイラ』第二部が、学生たちのみだらな話によってはじまるのは興味深い。第一部第十六章から第二部第一章までは同じ日の出来事をあつかっているのに、Joseph が目をさまして学生たちの話をきくところだけ、第二部の冒頭に置かれているのである。このことは、第二部において Joseph が人間の肉体的現実に直面しながら、いっそう肉なるものに魅せられて生きることを暗示していると思われる。

36) この習慣は第一部第一章においてすでにほのめかされている。Dare 夫人の下宿に着いて自分

の部屋に案内されたJosephは、ベッドの位置に注目している：「銅製のベッドは奇妙な具合に斜めに置かれて、ドアが全開することをさまたげていた」(p. 5)。

37) Josephは第二部第二十一章の誘惑の場面でも、Moïraの赤い唇に注目している：「(…)彼はあまりにも赤い唇を認め、こっそりとながめた」(p.162)。

38) また、第二部第二十一章には、「彼女〔モイラ〕のからだ全体にひそむ何かしらきゃしゃな感じは小鳥の姿を喚び起こしていた」(pp.164–5)という描写があるが、ここから浮かびあがってくるのは、肉あるいは肉欲の化身ではなく、保護されるべきひ弱な存在のイメージである。

39) このベッドはすでに述べたように、かつてMoïraによって斜めに置かれていたことでMoïraの代替物となり、Josephの肉体的欲望をひきおこしているからである。

40) 言うまでもなく、このセーターは、JosephがMoïraと出会うきっかけをつくっているからである。第二部第十章、JosephがDare夫人の下宿に行ってMoïraをはじめて見る直前、JosephはDavidに、もといた下宿にセーターを忘れてきたことをむきになって主張している(p.120)。この時点でJosephはDare夫人から聞かされてMoïraの帰郷を知っており、したがってJosephの興奮はMoïraと会いたいという下心をかいまみせている。つまりこのセーターはMoïraと出会うための口実をJosephに与えているのである。また、このセーターをMoïraが床に投げすてたことで、Josephのうちに怒り＝欲望が生じたことはすでに指摘した。

41) この鏡については、本論第二章で言及した(『ジョゼフを取りまく人物たち(1)』、pp.60–61を参照)。

42) *Varouna*, II,p.798.

43) *Le Revenant*, *Journal V*, 15 août 1949, IV,p.1094.

参考文献

グリーンにかんする研究書・論考は数多くあるが、この小論の作成に際して、主として下記の文献を参照した（◎印は研究書、○印は論考)。

◎ Antoine Fongaro：*L'Existence dans les romans de Julien Green*, Signorelli, Rome, 1954.

◎ Jean Sémolué：*Julien Green ou l'obsession du mal*, Editions du Centurion, 1964.

◎ Jean-Claude Joye：*Julien Green et le monde de la fatalité*, Arnaud Druck, Berne, 1964.

◎ Oswald Muff：*La dialectique du néant et du désir dans l'œuvre de Julien Green*, Keller, Zurich, 1967.

◎ Jacques Petit：*Julien Green*, 《*l'homme qui venait d'ailleurs*》, Desclée de Brouwer, 1969.

◎ Jacques Petit：*Julien Green*, coll. 《Les écrivains devant Dieu》, Desclée de Brouwer, 1972.

◎ Jean-Pierre J. Piriou：*Sexualité, religion et art chez Julien Green*, Nizet, 1976.

○ André Blanchet：《Moïra ou le nouveau roman chrétien》, in *La Littérature et le spirituel II*, 《*La Nuit de feu*》, Aubier, 1960.

○ 遠藤周作：「情慾の深淵」(『カトリック作家の問題・宗教と文学』所収)、「遠藤周作文学全

集」第10巻、新潮社、1975.
○　鹿島晃一：「『モイラ』論—恣意をこえる存在の影—」、上智大学フランス語フランス文学会発行 Les lettres françaises、第3号、1983.
○　長戸路信行：『ジュリアン・グリーン—『モイラ』の模様—』、千葉敬愛経済大学研究論集、第24号、1983.
○　浅野雅生：『Julien Green の《Moïra》論』、帝京女子短期大学紀要、第4号、1984.

〔付記〕この小論は1985年度、86年度各前期フランス文学特殊講義「*Moïra* 読解のこころみ」の講義ノートの一部を加筆修正したものである。作品からの引用に際しては、福永武彦訳『モイラ』（人文書院版「ジュリアン・グリーン全集」第4巻所収）等の翻訳を参照させていただいた。また、この小論の着想にかんして、Jean-Claude Joye の *Julien Green et le monde de la fatalité* からとくに恩恵をうけたことを明記しておきたい。